

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02913

研究課題名(和文) 隋唐の礼制と石刻資料研究の現在

研究課題名(英文) The Current Trend of Studies on Etiquette Systems and Stone-Inscribed Characters in Sui and Tang Dynasties

研究代表者

江川 式部 (EGAWA, Shikibu)

明治大学・商学部・兼任講師

研究者番号：70468825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1960年代以後に行われてきた隋唐礼制研究の研究動向を整理し、またこれまで文献史料に依拠してきた隋唐礼制研究に、新たに石刻資料を活用することを目的とした。研究の結果、唐代後半期において、祠廟に建てられた碑文の多くが、国や地方官署ではなく、藩鎮という軍閥によって建てられていたことがわかり、在地の祠廟やそこで行われる祭祀の保護・継承に、軍閥が深く関わっていた様子が看取された。この研究を通して、次の時代につながる新たな伝統の形成や、社会文化像の理解を考えるうえで、有益な知見を得た。

研究成果の概要(英文)：This study aims at marshalling research trends of studies on etiquette systems in Sui-Tang Dynasty which have been conducted since 1960s. Also, this study uses information acquired from stone-inscribed characters in order to restudy etiquette systems, which have been researched mainly based on literature. In conclusion, many of the epigraphs created in the latter half of Tang Era were built not by the government or the regional authorities but by a military clique called fan-zhen 藩鎮. That implies that it had a lot of involvement in conserving and inheriting not only local shrines but also ancestral rituals performed there. Through this study, we obtained useful knowledge in considering forming new traditions and understanding societies and cultures.

研究分野：中国史

キーワード：祭祀儀礼 礼制 石刻資料 出土資料 藩鎮 地方社会 隋唐五代 中国史

### 1. 研究開始当初の背景

中国史における礼制(祭祀儀礼制度)研究は、王権論や国家論への関心から、皇帝儀礼の解明を目指し、近年とくに精力的に研究が行われてきた分野である。しかし、これまでの礼制研究が拠り所としてきたのは、正史の礼志や礼典等の文献史料であり、そこに存在する大きな研究制約が見落とされていた。すなわち、編纂を経て完成した文献史料では、国家の標榜する礼制は明らかとはなっても、当時の地域社会に行われた祭祀儀礼の実態は、そこからは見えにくいという問題である。

他方、近年の隋唐時代史研究では、伝世・新出を問わず墓誌や碑刻等の石刻資料が、史料群として重要な役割を果たしてきている。これら石刻資料の活用之际、その利便を支えてきたのが目録類であり、楊殿珣『石刻題跋索引』(1940)はその嚆矢だが、近年の当該時代史研究においては、陸続と発見される新出土墓誌ばかりが研究史料として重視されている面があり、研究工具書として新たに編纂された目録も墓誌に特化したものがほとんどである。かつて研究を支えてきた廟碑・墓碑や塔銘等多くの伝世碑刻は、こんにち等閑視されてほとんど顧みられることがなく、これまでの貴重な成果や研究史が整理・総括されることも行われてはいないという研究背景があった。

### 2. 研究の目的

祭祀儀礼研究においては、墓誌のような地に埋められてしまう石刻に比べ、衆目の集まる屋外に造刻された廟碑・寺觀碑、墓碑・塔銘、題名・誡励碑などの、一般には「雑刻」と分類される石刻資料こそが、極めて重要な史料的价值をもつ。これまで中国各地で文物の調査を行うなかで、いまだ多くの「雑刻」が現地に残されていることを知り、伝世文献に比重を置く礼制研究への、石刻資料の積極的な活用を促すための基盤づくりを行うこと、またこれら石刻資料を含む新たな礼制研

究史料の開拓とその活用方法の提示を行うことが本研究の目的である。そのうえで、隋唐の地域社会における宗教・風俗を含めた祭祀儀礼の実態を明らかにし、次の時代につながる社会変化を礼制面からとらえなおすことを目標とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、以下のような方法で研究をすすめた。

#### (1) 研究文献・石刻資料目録の作成

近年の隋唐礼制に関する研究動向を整理し、「南北朝隋唐期礼制関連研究文献目録(続編)」を作成した。次に各種石刻に関する所在情報と研究史とをとりまとめた。

#### (2) 現地調査

上記(1)で作成した目録等をもとに、中国・日本国内における所在・所蔵調査を行った。新出石刻や所在不明の石刻については現地調査を行い、国内の各機関における拓本所蔵情報もあわせて収集した。研究期間内に行った現地調査は以下のとおりである。

〔海外〕

2015年9月：中国四川省成都市周辺調査

- ・重慶市大足北山石窟(唐五代題記・題銘)
- ・四川省博物院(唐代万仏寺出土文物ほか)
- ・金沙遺跡博物館(紀元前の祭祀建築遺構)
- ・武侯祠(祠堂碑ほか)
- ・三星堆遺跡(礼器及び祭壇)

2016年9月：中国北京市 河北省承德市・遼寧省凌原市・朝陽市を調査。

- ・古北口一帯の古祠廟(関帝廟・薬王廟等)
- ・平泉博物館(出土文物・石刻資料)
- ・富裕城址(唐五代～明代の古城址)
- ・遼中京遺址(城壁・附属寺楼等)
- ・喀左県博物館(出土文物・仏教文物)
- ・建平県博物館(唐代墓誌と出土文物)
- ・朝陽市南塔及び北塔博物館(三燕～唐代遺

構と出土文物)

- ・北京芸術博物館(唐代長沙窯出土文物)
- ・中国国家図書館(文物関係資料調査)  
2017年8月:中国陝西省西安市
- ・大唐西市博物館(隋唐石刻資料)
- ・碑林博物館(漢~唐石刻資料)
- ・西安交通大学博物館(漢~唐石刻資料)
- ・西安博物院(薦福寺出土文物ほか)  
2017年12月:中国北京市
- ・中国国家図書館(文物関係資料調査)  
〔国内〕  
2015年12月:奈良大学(研究報告)  
2016年11月:奈良国立博物館(造像銘)  
2017年2月:大谷大学博物館(碑帖・資料)  
2017年9月:東北大学図書館(拓本)  
2017年11月:京都国立博物館(文物)  
2018年2月:京都大学人文科学研究所(拓本・資料)

### (3) 個別研究

隋唐代礼制研究の研究動向について

石刻資料を用いた唐代礼制研究

唐代礼書研究の再検討

唐代礼制研究史料の開拓

具体的な成果内容については、以下「4. 研究成果」欄を参照。

## 4. 研究成果

### (1) 隋唐代礼制研究の研究動向について

隋唐時代の礼制研究に先鞭をつけたのは、陳寅恪(『隋唐制度淵源略論考』1963年)である。陳寅恪は隋ひいては唐の礼制が北齊儒学の系統を継承し、一部江東の習俗を典拠とした南朝の礼制を兼用したものであり、周礼を宣示していた北周の系統には当たらないことを述べた。陳寅恪のこの研究は、清朝崩壊後の实用礼学の衰退と、その後のマルクス史観を背景とした社会経済史研究の全盛の中では希少なものであった。続いて1965年に楊寬らが先秦古礼の研究を発表したが、1966~1976年の文化大革命によって大陸に

おける礼制研究は停滞することになる。

大陸で礼制研究が停滞していた間、台湾では甘懷真が皇帝治政への関心から唐代家廟の研究を進め、一方で中国の伝統文化として唐代礼制を分析した研究が章群によって発表された。

日本では天皇制の研究を背景として、戦前より中国礼制への研究関心は維持され、戦後の中国史の分野でも、楊寬と親交のあった西嶋定生とその学統を受け継ぐ尾形勇・金子修一、また渡辺信一郎や松浦千春らにより、とくに皇帝祭祀の制度と実態の究明が行われてきた。それらの研究は、各王朝下での祭祀儀礼(とくに皇帝祭祀)の個別具体的なありかたを明らかにすることに主眼が置かれており、先に陳寅恪が示したような、礼制の系統を闡明することを目指してはいなかった。

文革終息の後80~90年代には胡戟など歴史学の分野から礼制研究に取り組む研究者が現れた。やがて2000年代に入ると経済発展を背景に中国古来の伝統文化や社会秩序が重要視されるようになり、礼制研究がひとつの歴史研究課題として、中国の学界に認識されるようになる。現在では法制・外交・経済・文化等の研究において、当時の王朝礼制の理解が不可欠と考えられるようになっており、中国王朝礼制の確立期とされる唐代礼制の具体的なありかたについて、多くの若手研究者らが新たな視点から陸続と研究を発表している。今後は既存史料の見直しと、新たな史料源の開拓とが必要となろう。

本研究ではこれまでに発表してきた「南北朝隋唐礼制関連研究文献目録」をもとに研究動向を整理し、「南北朝隋唐礼制関連研究文献目録合訂版(1980~2015)」に20世紀~近年の礼制研究動向を付してオンデマンド版を作成した。その概要は「国家祭祀と喪葬儀礼」(『日本古代交流史入門』2017年)に、詳細は2017年5月に國學院大學で行った研究報告「中国隋唐礼制研究の現在」で発表した。

## (2) 石刻資料を用いた唐代礼制研究：

唐代の石刻資料のうち、これまで歴史研究にはあまり利用されてこなかった廟碑（祠廟碑・家廟碑）をとりあげて検討した。墓誌と異なり、唐代所刻の廟碑が歴史研究に利用されにくい理由の一つは、千年以上屋外に置かれていたことによる保存状態の悪さである。重刻・早期埋伏の例を除き、基本的には文字の判読が困難なものが多い。また廟碑は本来建物に付属するため、その建物が毀廃した際に目的を失って放棄され、また重修の際に碑文を磨去して新刻に再利用することさえあり、残存数が極めて少ないことがあげられる。さらには祠廟・家廟そのものの研究があまり重視されず、ほとんど進んでいないことも史料価値に影響を与えている。

本研究において廟碑のいくつかについて初歩的な整理と読解を行った結果、以下のような点が見えてきた。まず祠廟碑については、現地の人心掌握のために、節度使が自発的に古廟を再建する事例があったこと、またその際、中央政府に対する許可はとっておらず、祭儀や廟運営にも独自色を持っていたと推察された。また家廟碑については、家廟を立てる際の申請から許可までの手順や、長安に家廟を置くことで祖先を唐朝の質とする意味があったこと、また立廟時に父母らに贈官が行われることから、立廟者を起点に、上の世代を後付けで顕彰する制度であることも判明した。

唐代においては国家による地方の民間祠廟の統制までは行われておらず、賜祠額等の手段を通じて正祠と淫祠とを区別していく宋代以後の祠廟統制へのプロローグとして重要な意味をもつと考えられる。当時の地方社会における藩鎮と祠廟との関係をどう評価するかについては今後の課題としたい。

本研究に関しては「唐代の廟碑 祠廟碑・家廟碑とその諸相」として2015年12月に

奈良大学で、「唐代の藩鎮と祠廟」として2016年2月に関西大学で研究報告を行った。なお本研究の基礎研究として、石刻資料及び研究文献目録を作成する予定であったが、パソコンの破損によるデータ消失が生じたため研究期間内での完成を断念した。今後データの再入力作業を継続して、完成を目指すことにしている。

## (3) 唐代礼書研究の再検討

伝世する中国唐代の礼書としては『大唐開元礼』150巻（以下『開元礼』と略称）が知られているが、このほかに『大唐郊祀録』10巻（以下『郊祀録』と略称）という史料がある。『郊祀録』は、『開元礼』後に編纂された礼書であり、唐代の史料の中では比較的完全な形で伝世する。しかし唐後半期の礼制史料として重要な位置にありながら、同時期に編纂された『通典』の礼典部分に比べて研究利用は極めて限定的である。その最たる理由は、本書の内容が「郊祀録」の名のとおり礼制の中の郊祀の記述に終始するからであろうが、加えて本書がこれまで精密な校勘を経ておらず、また版本研究も少なく解題が不十分であるため、利用しにくいという問題もあった。『郊祀録』は杜佑『通典』礼典の沿革礼部分と同様に、礼目の各条に典故を附するという書式で記されている。このことから、これら貞元期に上梓された両書は、実際の朝廷奏議の基礎資料となるよう企図されたと考えてよい。流伝や校勘に問題を抱えているものの、『開元礼』後の唐代礼書のほとんどが散逸して伝わらないなか、『通典』礼典と並んで唯一残された貞元礼制の専著であり、さらに後人の加筆により、結果として一部唐末に至るまでの記事も含まれていることも明らかとなった。一般に知られた適園本・指海本の刻本に加え、日本静嘉堂蔵本を含め9種類の抄本が現存しており、今後これら抄本を含めた校勘研究が課題である。

本研究に関しては「唐代礼書の系譜」として2017年2月に大正大学で研究報告を行ったほか、「唐・王涇撰『大唐郊祀録』」(『法史学研究会会報』20、2017年)を公表した。

#### (4) 唐代礼制研究史料の開拓

新たな唐代礼制研究史料の開拓を目指して、上記(2)に述べた石刻資料のほか、仏教など宗教関連の文物や、敦煌文書に含まれる法制文書なども精査検討してみた。当時の人々の「礼」に対する観念がどのようなものであったか、それが現実の社会にどのように表れていたのかということについては、正史や礼典ではとらえにくい部分がある。唐礼が社会身分や孝を軸とした秩序を重視していたことは周知であるが、社会秩序の外に置かれた仏僧などの出家者や教団が礼制上どう扱われたのか、また女性や長・少(幼)などがこれにどう関わるのかという具体的な問題は、石刻や宗教または法制関連の史料によって究明できるのではないかと考えた。

本研究では、試みに当時の模擬判例集である判文の内容を取り上げ、何がどのように問題視され、どう考えるべきと結論されていたのかを整理検討してみた。その結果、唐代においては社会的身分秩序が長・少の年齢秩序に優先していたこと、また孝の実践が制度的な諸事情に優先すると考えられていたこと、ただしそうした実践も行き過ぎは否定されたこと、などが確認できた。また官人に対しては、社会的身分に応じた生活が求められ、親族扶養に関する道義的責任も問われたことも看取された。

社会的身分秩序の遵守は、唐礼においては官人身分の人々の間のみ適用されたのではなく、『開元礼』に庶人礼の規定があるように、官品をもたない庶人に対しても適用されるべきものとされていた。しかし管見の限り、その内容に関わる文案を判文において確認することはできなかった。これを考えるに、

唐朝の国家礼典における庶人礼の規定は、礼文としては存在しながらも、実社会における遵守励行を求めるまでには至らなかったのではないかと推測される。礼典の標榜する規定と、実社会への適用とが必ずしも一致しないことが明らかとなり、礼制の実態を考えるうえで極めて重要な示唆となった。

本研究に関しては「中国中世の礼制構造」(『比較思想研究』43号、2017年)、「唐代の社会と礼」(『比較思想研究』44号、2018年)、「判文からみた唐代の礼と社会秩序」(『法史学研究会会報』21号、2018年)を公表した。

#### (5) 本研究によって導き出された新たな研究課題とその展望：

以上の研究から、以下の点が導きだされた。まず礼制の制度と実態の問題については、従来の研究で行われてきたような、制度規定が目指した国家礼制の在り方や方向性を問うこととあわせて、実社会への制度適用には限界があったことを理解しておくべきである。また、そうした唐礼と実社会との関係を考察するには、石刻資料のほか宗教や法制関連の史資料は極めて有効であり、今後の活用が求められる。

そして、本研究で検討した祠廟碑等の石刻資料の内容からは、新たに唐代後半期における地方の祠廟や祭祀の保護・継承に、軍閥である藩鎮が深く関わっていたことが看取された。このことは、従来の諸研究では見落とされてきた視点である。次の時代につながる新たな伝統の形成や社会文化像を理解するうえで、極めて重要な知見であり、今後の研究課題として追究していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

江川式部、唐代の社会と礼、『比較思想研究』、査読有、44号、2018年3月31日、

pp.185 - 188

高瀬奈津子・江川式部、『封氏聞見記』訳注(五)、『札幌大学総合研究』、査読無、第10号、2018年3月31日、pp.235 - 254  
江川式部、判文からみた唐代の礼と社会秩序、『法史学研究会会報』、査読有、21号、2018年3月26日、pp.171 - 181

江川式部、史料紹介 唐・王涇撰『大唐郊祀録』、『法史学研究会会報』、査読有、第20号、2017年3月31日、pp.164 - 170

江川式部、稲田奈津子著『日本古代の喪葬儀礼と律令制』、『法制史研究』、査読無、第66号、2017年3月31日、pp.225 - 230  
高瀬奈津子・江川式部、『封氏聞見記』訳注(四)、『札幌大学総合研究』、査読無、第9号、2017年3月31日、pp.100 - 70

江川式部、中国中世の礼制構造 唐朝における礼・敬・孝・恩を手掛かりに、『比較思想研究』、査読有、43号、2017年3月、pp.204 - 207

江川式部、南北朝隋唐礼制関連研究文献目録(中文篇3)2010 - 2014年、『法史学研究会会報』、査読有、第19号、2016年3月31日、pp.153 - 164

高瀬奈津子・江川式部、『封氏聞見記』訳注(三)、『札幌大学総合研究』、査読無、第8号、2016年3月31日、pp.105 - 130

[学会発表](計6件)

江川式部、唐代の社会と礼、比較思想学会近畿支部例会報告、2018年2月24日、佛教大学8号館第5会議室

江川式部、中国隋唐礼制研究の現在、國學院大學・国史学会例会報告、2017年5月27日、國學院大學渋谷キャンパス3号館3308教室

江川式部、唐代礼書の系譜、「学術と支配」研究会例会報告、2017年2月25日、大正大学3号館4階第6閲覧室

江川式部、中国中世の礼制構造 唐朝における礼・敬・孝・恩を手掛かりに、比較

思想学会近畿支部例会報告、2016年7月23日、佛教大学8号館第5会議室

江川式部、唐代の藩鎮と祠廟、第57回遼史を読む会「唐代史との対話及び交通史の展開を目指して」研究合宿報告、2016年2月28日、関西大学六甲山荘

江川式部、唐代の廟碑 祠廟碑・家廟碑とその諸相、「文字文化からみた東アジア社会の比較研究」研究会報告、2015年12月19日、奈良大学A315教室

[図書](計4件)

鈴木靖民・金子修一・田中史生・李成市、江川式部、ほか32名、『日本古代交流史入門』、勉誠出版、2017年6月30日、全573頁

氣賀澤保規、江川式部、ほか8名、『雲南の歴史と文化とその風土』、勉誠出版、2017年3月10日、pp.137 - 156、全269頁

高瀬奈津子、雷聞著・江川式部訳、ほか18名、『東アジアの礼・儀式と支配構造』、吉川弘文館、2016年3月1日、全328頁

氣賀澤保規、江川式部、ほか7名、『隋唐佛教社会の基層構造の研究』、汲古書院、2015年9月30日、全354頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江川 式部(EGAWA, Shikibu)  
明治大学・商学部・兼任講師  
研究者番号: 70468825